

先妣十七回忌

菅茶山

旧夢茫茫十七春

梅花細雨復芳辰

墳前稽顙頭全白

曾是懷中乳索人

【作者】菅茶山（一七四八〜一八二七年）（延享五年〜文政十年）。江戸時代後期の儒者。備後神辺（かんなべ）の人。私塾「黄葉夕陽村舎」（後の廉塾）を開いて、姓は菅波、名は管師（ときのり）、字は礼卿、通称は太仲。号して茶山。備後の人。詩集に『黄葉夕陽村舎詩集』などがある。

塾名や、詩集名は、菅茶山が好んで朝夕眺めていた山の名に因り、廉塾の南一キロメートルほどのところにある。

【語釈】*旧夢…過ぎ去った昔。*茫茫…遙かなさま。ぼんやりとしてはつきりとしなさま。果てしなく広々としているさま。

*芳辰…よい時節。多く、春の季節を謂う。*墳前…（土を盛り上げた）墓の前。*稽顙…坐つて頭を地面に暫くの間、つけている礼。叩頭の礼。喪に服する者の礼を特に謂う。*懷中…ふところの中。

【通釈】過ぎ去った昔は、遙か遠くの十七年で。梅の花にこぬか雨が降る春のよい時節がふたたび廻ってきた。

墓の前で、坐つて頭を地面につけている礼をする者（＝作者）の頭髮は、全て白くなつてしまつたが、以前に（＝嬰兒の時）ふところの中の乳を探し求めるた者（亡母の子で、老年になつた作者）である。

【備考】亡き母の十七回忌の法要。郷里の習慣にしたがつて焼香して礼拝し、涙を流した後、この詩を作つた。*この作品は、作者が宋詩に傾倒したことを覗わせる詩である。